故郷第七場面　読んだ読んだ

三年四組　氏名

それからまた九日して、わたしたちの旅立ちの日になった。ルントウは朝から来ていた。シュイションは連れずに、五歳になる女の子に船の番をさせていた。……すいか畑の銀の首輪の小英雄の面影は、もとは鮮明この上なかったのが、今では急にぼんやりしてしまった。これもたまらなく悲しい。

物をもらうために主人公に会いに来たルントウの心を主人公はだんだん分かってきた。ルントウも上の人に上手く取り入って物をとっていくような計算高いずるい人になってしまった。自分だけが昔のように話すことを楽しみにしていたのだと気付いた主人公は、最後の希望だったルントウを失い、全てをあきらめ、故郷に思い残すことはなく、風のように去って行った。ヤンおばさんやルントウを見て、自分も流され、変わってしまう主人公のような人間で良いのか、読者の心に問いかける魯迅の思いがあるのだった。

さん

わたしたちが旅立つ日、ルントウがやってきた。「私」に別れを告げるためでなく、物をもらうためだ。わら灰の中に埋めてまでしても物をもっていきたかったのだ。すいか畑の銀の首輪の小英雄は、すっかり欲が深くてずるがしこい者になってしまった。ルントウも変わってしまい、「わたし」の故郷への思い入れもなくなり、むしろ、早く去りたいぐらいだった。魯迅はこの姿を書くことによって、このようになってはいけないと、次の世代に伝えているのではないだろうか。魯迅の「中国を変えよう」という熱い思いが分かる。

くん

主人公たちが旅立ち日が来たのに、ルントウとは「暇がなかった」として話をせず、話そうともしていなかった。また、ルントウの方針は、主人公を見送ることよりも、品物をもらうことの方が大事であると思っているのではないか、と考えられるところがあった。主人公は、故郷の人々の変わりように絶望し、故郷への名残惜しい気持ちなどもなく、自分のいるべきところではないと思いながら去って行ったと思った。作者は中国の現実をこうした形で訴えていると思った。

さん

主人公は、「帰りはいつ？」と言ったホンルの言葉をどう感じたのだろうか。自分と同じ思いをホンルにさせてしまう」、そう考えたのではないか。かつてのルントウと主人公も、今のホンルとシュイションのように、仲が良かった。だが、しかし、ルントウ達は、何事もなかったかのように連絡をも取り合わずに、それぞれ辛い思いをもって再会した。このときのように辛い思いをさせたくないという思いの一方で、以前のルントウはもういない。そのような悲しみをもっている。そのため、一秒でも早く故郷から離れたいのであった。

さん